

## 小さな昆虫記

私の生れ故郷は美作国で、その国唯一の都市津山から東に約三里、中国山脈の一峰那岐山から北北東に約三里半の小さい山間盆地の真中にある。出雲街道に沿った一並びの街村である。標高は約100メートル。

私は子供の時、「昆虫」とはあまり縁がなかった。採集網など振り廻さなかった。だが田舎の子供であったから、深い馴染の「むし」もあった。蟬、とんぼ、かぶとむし、はち（みつばち、あしながばち、中ばち、大ばち）いなご、すいむし、ぎす、ぶと、のみ、か等。とんぼの内では特に「おはぐろとんぼ」——黒翅、金緑色の尾、日蔭の草木にとまって翅を時々ゆっくり拡げては畳む。その様子が好きであった。それからあぶ（水あぶと呼んだ）——夏になると私は友達と近所の川に「水あび」に行った。おやにらみの泳ぐ小さい里川だが所々に深い碧い淵があった。岸には水面へ梢を出張った何かの大木があった。そこから淵へ飛び下りる。高い所から飛び込むほど偉いのである。それから犬泳ぎで泳ぐ。大きい波を立てて泳ぐ程偉いのである。「水あぶ」が来たと誰かがいう。私達は大急ぎに慌てて水に潜りこむ。もうよいよいかと呼吸をころしているうち、何時の間にもやら浮き上っていた背中にちくりと痛みを感じる。「水あぶ」だと叫んでまた潜りこむ、それは大きい緑色の眼をしたあぶ (*Tabanus* sp.) であった。

一つ妙な馴染の虫があった。それはコウカアブである。もっとも、コウカアブなる名前はずっとのちほど、昆虫学を学ぶようになってから知ったもので、その当時なんと呼んでいたか一寸思い出せない。或は名前はなかったのかも知れない。

その名前の示すように、私はこの虫と厠の中やそのまわりで顔見知りになっ

たのである。その翅脈である一点から四方へ派出しているといった感じのする黒褐色の二枚の翅、頭は眼だけかと思うほど大きい眼をもっていて、その長め（頭から腹の先まで約15, 6メートル）の身体は全体が燻したような黒色の虫、徳利形に先き脹みの腹部の附根には、一つの白い帯があって一寸意気な感じがする。そこは丁度擦硝子のように半透明で中まで透いて見えそうである。腹部の端の方の節の両側にも光線の具合で白く見える部分がある。この虫が小さい間をおいて、ブップッと鈍い音をたてて飛び廻る。私は最初は、鳴き声だと思っていた。次には飛び乍ら時々劇しく翅を振動さすために出る翅の音だと思った。翅の振動音も聞えるには聞えるが、あの音に比べるとごく低いものである。実はこの音は打ち振られている翅が周りの器物の面に触れた時に発するものなのである。

私は大きくなってから、不図した機みで勉学を続けるために大都市へ出た。又妙なことから昆虫学を専攻するようになった。そうしてこの昆虫を学名で言うようになった。*Ptecticus tenebrifer* Walker, コウカアブというのである。

大都市の学校は水洗便所で、そこではコウカアブを見ることはなかったが、どこからどうしやって来るのかコンクリートの建物の部屋の中や廊下の隅、所々の窓などでその姿を見かけ、その翅の音を聞いた。

学校が今年終るといふ年の夏、私はTさんとI君に連れられて始めての信州へ行った。徳本峠から上高地、槍を往復した。登山ではなく昆虫採集が目的であった。始めて見る日本アルプスの山は故郷の山に比べてなんと素晴らしく、厳しい風景であったことか。いや、実をいうと私は厠の中でも他国をしみじみと感じていたのである。厠の片隅に置かれた「木べら(?)」を何に使うのであろうか」と思い乍ら用を足している時私は懐しい翅音を聞いた。しかしそれはあの虫ではなかった。燻した黒色には似ても似つかぬ黄色の、白色の帯ももたない虫であった。

翅脈の様子は同じであるが、その地色は黄色で周縁部が一寸黒みを帯びている二枚の翅、黒緑色の大きい眼、その間に挟まれた額や、口等の頭の他の部分は黄色、胸部も脚の先まで黄色、腹部も地色は黄色であるが、先の方は一帯に

黒色、付け根の方には背面に小さい黒色の斑紋がある。身体全体がセルロイド様の光沢をもっている。そうして、腹部の黒い斑紋のない部分は、腹の中まで透いて見えそうな半透明なのである。体長は20ミリメートル前後。この虫はコウカアブと属名は同じで種名だけ違う *Ptecticus aurifer* Walker, 和名はキイロコウカアブであった。

昔馴染のコウカアブに兄弟があったわけである。そうしてこの兄弟は、北の国へ行けばコウカアブがいなくなり、南に行けばキイロコウカアブがいなくなる。高さで言えば、一方は低地に居るが一方は高地に居るという関係にあるのではないかと思った。

私は其後仕事の方向が次第に変わって、溪流が仕事場になった。何回か信州へも行った。キイロコウカアブも私にとって目新しいものでなくなっていくにつれて、二種の *Ptecticus* の関係はあはしたものだと思い込んで別段注意も払わなくなった。そうして之等の虫のことを何時ともなく忘れていた。溪流の仕事のホーム・グランドとして京都加茂川の上流貴船谷を選んであった。私はそこへ足繁く通った。知り合いの人々も出来、厠も遠慮なく使うようになった。或る夏、私はそんな貴船谷の知り合いの家(約200メートルの厠)でほんの僅かの数ではあったがコウカアブに混ったキイロコウカアブを目撃した。

「日本昆虫図鑑」を見ると、どちらも同じ様に本邦内地から台湾まで分布しているとのことである。この二つの虫の分布関係は私が思っていたのとはどうやら違うものらしい。先輩諸氏や、友達に聞いて見ると、Tさんは京都山科四宮(約100メートル)には両方居るがキイロの方が遙かに少ないと言われる。M君は土佐の高知市(約2メートル)ではコウカアブだけだという。U君は今の京都衣笠殿町(金閣寺附近)の家に移ってから約三年になるが、その間にキイロを一匹見たという。勿論コウカアブの方は毎年沢山現れるのである。S君は大阪市の北部箕面の奥の高山(約400メートル)でキイロを採集したが石橋(約20メートル)ではコウカアブだけだという。そうして見ると、標高とは無関係にその場所が全くの平地であればコウカアブだけが、山ががった所にキイロもいることになりそうである。そして、もし全くの山間部ではキイロコウカアブだけし

か居ないということになれば、それはいわゆる山地種と平地種との関係になるわけであろう。そう思ってさらに資料を集めて見ると、U君は大台ヶ原山の大台教会の厠ではコウカアブばかりだったというし、Tさんは大台での採集品の中にキイロがあったともいう。私自身も東北の峩々温泉（約800メートル）で両方の種類を探っていた。

私は昔馴染のこれらの虫の分布関係をなんとかしてもう少しはっきり知りたと思うのである。そこで皆さんにお願いする。どこかへ旅行をなさった時、厠やそのまわりで、ブップという翅音が聞えたら、どちらの種類か確めて欲しいのである。或る友達は、恰好がこれによく似た時があるから、昆虫学をやっておられぬ人には紛らわしくて、わかりにくいかも知れぬというけれども、蜂は翅が4枚であるのにこの虫は蠅だから2枚（後の2枚は平均桿という小さく短い耳搔き状のものになっている）だけであるから、この点さへ注意すれば間違ふことはないと思う。またこの虫は何処かへ止まる時には、2枚の翅をきれいに合せて、それが丁度腹部を一面に蔽うように畳むけれども、厠の近くに飛んでくる蜂では畳み方もきれいではないし、腹部全部が翅で蔽われるようなこともない。だが、何よりもあの特徴のある翅音が一番よい識別の手がかりになると思う。そうしてそれが黒色だったらコウカアブ、黄色であつたら、キイロコウカアブなのである。

書き忘れたけれども、これらの虫は夏の間だけ出るものようである。

**附記** キイロコウカアブと紛わしい蠅が一つある。ベッコウバエ、*Dryomyza formosa* Wiedemann というものである。

身体の色は黄色だし、或いは同じ翅音を立てるかも知れぬ。しかし、眼は小さくて頭が眼だけだという感じはさらさらしない。胸部には黒みがかった縦条があり、毛もかなり生えている。腹部は形も大分違ふし、黒い斑紋もなく、細い毛が密生していて内部が透いて見えそうだという感じはしない。しかし最も違ふのは翅であつて、黄色の地の上に黒褐色の小点が四つ五つ散在している。丁度鼈甲に似た感じがするので、この名前がつけられたのだと思われる。これらの点を注意すれば、キイロコウカアブに間違えることはないであろう。